

第751号 ヤスクニ通信 2017年8月13日  
日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

〈祈りのために〉

これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

(ヨハネによる福音書 16章 33節)

去る6月15日の早朝に、またもや強行採決によって成立した「共謀罪」が、国民の不安をよそに7月11日には早くも施行となった。国民が声を挙げて悪法の強行採決は繰り返され、今や声を挙げて平和を守ろうと企てることすら犯罪とみなされかねない世となった。市民サイドは負け続けている。沖縄の辺野古新基地建設現場でも高江ヘリ発着場工事現場でも、平和を求める市民の非暴力抵抗運動が淡々と続けられ工事車両の通路を塞ぐが、表情を失った若い機動隊員によって排除（ごぼう抜き）され、工事車両は現場に入る。日々、何度も繰り返されるこの光景から、我々は「負けっぱなし」と感じる。無念であり、虚しくもある。

しかし…主イエスは、最後の晩餐において弟子達に語りかけ、冒頭の言葉をもって終えられた。「わたしは既に世に勝っている」。このように語る主イエスご自身、この後すぐにユダヤ当局によって逮捕され、ののしられ、蔑まれ、つばを吐きかけられ、足蹴にされ、鞭打たれ、十字架に付けられ、苦しみの中に息を引き取られる。この世の目で見るならば「完全なる敗北」。しかし「わたしは既に世に勝っている」と弟子たちに告げておられ、息を引き取る際には「すべては成し遂げられた」との言葉を残しておられる。

主イエスにおける、この何ものにも呑み込まれない強靱さとはどこから来るのか。完全なる敗北と映るこの状況にあつての勝利とは何か？

主イエスは、オリーブ山で「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」（ルカ 22:42）と祈られた。父の御意志を生き御心を現す為に父から派遣をされた者である、という自己認識に立っておられる。そして「（父が）わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです」（ヨハネ 17:18~19）と、派遣した弟子たちのためにも祈り、ご自身を注ぎ込む。「敵を愛し迫害する者のために祈る」（マタイ 5:44）主は、父より遣わされた者として御心を生き抜く。このあり方が「勝利」であり、平和を実現する礎である。

非暴力抵抗運動は、「負け」と見えつつ、主の御前に自己を鍛え御心を現す勝利の道であると信じる。敵は己自身である。己の内に湧き出る虚無や憎悪や諦念に呑み込まれないための祈りと、現場を支える祈りの輪が大事であろう。

〈祈り〉主よ。この世の敵は自分自身であることを覚え、この敵に勝利するために聖霊によって己を焼き尽くして下さい。ただひたすら御心を生きる者とさせて下さい。

稲生義裕(札幌豊平教会 北海道中会ヤスクニ・社会問題委員)

## <ヤスクニ問題とわたし>

中家誠（東京中会無任所教師）

委員会からの依頼を受けて、貧しいながら、私の経験を少しく述べたいと思う。

私が小学生のころ、第二次世界大戦に入った時で、学校では朝礼があった。皆が運動場に集まり、校長先生が白い手袋をして、教育勅語を朗読。その後、運動場を行進。「歩調をとれ！米英鬼畜と思え！」と歩調を取らされた。

もう少し成人してから、次のようなことを聞いた。教会の礼拝で「東方（宮城）遥拝」がなされんこと、特高警察が礼拝を監視していたことなど、そうした記憶があったので、神学校を出て宇都宮戸祭伝道所（現在の宇都宮松原教会）に赴任した頃は、「靖国神社国家護持法案」が出ており、東京中会では「これに対抗してハンストをしよう」との呼びかけがあり、私も一週間の断食をした。一週間を飲み水だけで過ごした。断食で怖いのは「立ちくらみ」と教わった。終了の日、ちょうど日曜日で、無事礼拝（説教）を終えて、ホッとしたことを覚えている。

話は替わるが、あの頃は、日本キリスト教会全体に「開拓伝道」の気運があり、「各中会に一つの大会伝道地」を設け、北は釧路、東京は仙台、近畿は名古屋と広島、九州は長崎と沖縄。私は広島に召しを受けたので、宇都宮を辞して（教会会堂と伝道教会は終了）、広島へ向かった。

広島は原爆の被災地で、平和運動が盛んであった。しかし私は「平和運動も大事だが、それよりも伝道が第一」と考えたので、そのことに心を砕いた。先ず会堂の用地探しから始まり、土地は得たものの、会堂建築に至らず、9年目にしてようやく会堂建築を終えたのである。だから私の働きは、ヤスクニ問題というよりは、開拓伝道に力が注がれたのである。

さて戦後70年。日本は再び以前の日本に帰ろうとしているかに見える。このままで行くと危険である。憲法を変え、戦争が出来る国となり、その精神的支柱を神社神道、天皇制に求めている。私は憲法九条があることを、「神の摂理」と思っている。これがあってこそ、世界の中で「戦争をしない国」として平和裡に守られて来たのではないか。

最後に、最近のニュースの中で、心を打つ一つの報道がある。それは劉曉波（リウ・シアオ・ポー）氏の死（61歳）である。この人は、中国共産党の一党独裁の歪みを正し、三権分立を求めて、非暴力の闘いをした人である。そのために投獄され、獄中でノーベル平和賞が与えられた。

彼の残した言葉に私は非常に心打たれる。「恨みを捨てよう。恨みは私たちの心をむしばむ。私たちに敵はいない。理性的に対話しよう」。この言葉は、私たちの主イエス・キリストのみ心に、何と近いものであることかを思う。

## 沖縄でキリストにあって一つであるということ

川越弘（沖縄伝道所牧師）

沖縄に住んでいて見えて来ることは、日本人と沖縄の人々との間には植民者と被植民者との関係があるということです。沖縄が大好きになっても、沖縄戦を押し付けて「集団強制死」を命じ、基地のために住民の土地を強奪した米軍とそれに加担する日本政府に、無意識・半無意識的に同調してきた日本人が信用できないという思いが、南国特有の穏やかな沖縄の人たちの根底に横たわっております。私たち日本人は、400年前の薩摩侵略以来今日まで続いている沖縄差別の加害者の側に自分がいて沖縄で生活しているということ、いつも考えなければならない立場にあります。

そんな中で教会においては、「わたしたちの国籍は天にある」（ピリピ 3: 20）。「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆キリスト・イエスにあって一つだからである」（ガラテヤ 3 章 28 節）という、神の民という視点から見るようにしております。神の民はあらゆる民族や国民を優先しており、この神の国籍に私たちの主なる神が永遠の契約として選んでおられるからです。こうして「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」（マタイ 25: 40）という、キリストの命じるままに生きるとき、沖縄の人（ウチナンチュウ）の生き方は、命どう室の魂に誇りを持ち沖縄の歴史に責任を担う生き方にあります。沖縄が踏みにじられ差別されてきた不正さを訴えることです。それに対して日本人（ヤマトンチュウ）は、日本の歴史の真実に目が開かれて、加害者としての歴史を深く自覚して生きることにあります。自分の中に巣食って絡み付いている天皇崇拜と日本的ナショナリズムと闘って、償いの生き方をするように召されているからです。キリストにあって一つであるという両者の生き方は、決して混ざり合う一致ではありません。それぞれ両者は異なる歴史を担っているからです。むしろ正反対の歴史を担って生きる者として、神から選ばれているのです。そこに両者の独立性と自由があります。これが「国籍が天にある、キリストにあって一つである」具体的な生き方です。…だからと言って、沖縄伝道所では特別な具体的な行動があるわけではありません。いつも心の中に置いていなければならないことだからです。

「神はご自分のかたちに人を創造された。すなわち神のかたちに創造し、男と女とに創造された」（創世記 1: 27）とあるように、三位一体なる神は、神御自身の交わりにおいて人間を創造されました。「すなわち男と女とに創造された」のです。「男と女」は人間の交わりの原型です。父とキリストと聖霊の交わりは、混合することなく本質を分離しないで、三つの神でなく一つである神のかたちにかたどらせて、「男と女」が造られたのです。人間の交わりの原型としての男と女は、それぞれ異なる性と賜物を保ち、互いに独立し自由である時、一つの共同体として生きるからです。沖縄の人と日本人との交わりの関係は、ここから来ていと言えます。

それゆえに私たちは、これまで踏みにじられて来た沖縄の人々の叫びを、沖縄の人々とは別の踏みにじってきた側の日本人として彼ら以上の痛みをもって受け止める責任を、神から問われております。ところが、全く足元にも及んでいないのが現状です。しかし「キリストと共同の相続人」（ローマ 8: 17）の約束をいただいている私たちは、足りない信仰と奉仕であったとしても、再び来られるキリストが私たちの足りなさを償って完成してくださる約束があるために（ヘブル 9: 28）、自分の弱さにめげないで、精一杯自分を差し出して一歩でも踏み込んで生きることを願っております。

（大会靖国問題特別委員会委員）

## <ヤスクニ・ニュース>

「沖縄からヤスクニを問う」(池永倫明著 新教出版社 1979年)が沖縄で再評価

琉球・沖縄―日本民衆の交流のタベ(5月13日午後6時)が、船員会館で行われ、石原昌家(沖縄国際大学名誉教授)さんは『援護法』で集団催眠にかけられた沖縄と天皇代替わり」というテーマで話された。彼は講演の中で、政府が戦後の沖縄に軍人軍属対象の「援護法」の適用を拡大して、戦争責任を不問にした。沖縄の遺族も天皇のために死んだ(殉国死)というからくりの集団催眠にかかっているのだから、その構造に気づかないし、警鐘を鳴らしても無反応のまま、自衛隊を自ら誘致するという戦前よりも悪い状態にあることを憂いた。

そんな中で上記の書物を取り上げ、1970年代に池永牧師が、新聞に投稿して訴えた内容を紹介された。圧巻は、沖縄県戦没者遺族会長の金城和信(魂魂の塔の横に建てられている胸像)さんに、新聞を通して質問したことにある。その質問(要点)は、「(1)遺族会は、戦後処理をなおざりにし、福祉政策も立ち遅らせ、軍事費に膨大な予算を組んできた自民党と癒着関係に立たれるのですか。(2)靖国神社国家護持法案が国会に上程され、遺族の中から最も強い反対者が出ている。平和を願う遺族会がなぜ、この法案の推進者になろうとされるのですか。(3)アジア各地の戦争遺族たちとの交流をはかる気持ちがありますか。靖国法案に反対している私どもと、意見を交換する機会をつくってください」(『ヤスクニを問う』28-29頁)等である。

「米国依存から脱却提言」…平和学の父・ガルトゥングさん

「東アジアは今、危機状況にある」として、「日本人のための平和論」(ダイヤモンド社)を刊行した。ガルトゥングさんは、「米国と距離を置いて、独立した考えをすべき」と言い、日本はテロなどに巻き込まれるリスクを顧みないで米国に“中毒症状”のように追従していると、「トランプさんが支配する国に頼るのは危険。この問題についての国民の議論が少なすぎるし、歴史や国際情勢への知識にも欠如した点が見られる」と警鐘を鳴らした。(沖縄タイムス7月14日)

映画「ハクソー・リッジ(弓のこぎり・崖)」(メル・ギブソン監督)に大きな反響

「汝殺すなかれ」を第一の戒めとして、沖縄戦の日本軍司令部の首里とつなぐ激戦地となった前田高地(浦添)の150mの断崖で、武器一つ持たず米軍の衛生兵としてモルヒネと包帯を手にして75人(日本人2人)の命を救ったデズモンド・ドスさん(セブンスデー・アドベンチスト信徒)の実話を元にした映画である。壮絶で凄惨な戦争の凄まじさと酷さ、それに対して神の命令に一心に従おうとする一人の兵士、それが浮き彫りに描かれていて、観る者に感銘を与える。それでも、「9万人余りの住民が戦闘に巻き込まれて犠牲になった沖縄戦の真実が全く描かれていない」(沖縄タイムス7月18日)という批判もある。



「慰安婦」記念日 2018年制定

韓国政府は、旧日本軍の「従軍慰安婦」問題に関して、2018年に慰安婦被害の記念日を制定し、19年に研究所を設置、20年には「歴史館」を建設すると表明した。文在寅政権の「国政運営5か年計画」の課題として発表した。(沖縄タイムス7月20日)

辺野古新基地、沖縄県が国を提訴 岩礁破碎差し止め求める

沖縄県名護市辺野古の新基地建設を巡り、無許可で岩礁を破碎するのは県漁業調整規則に違反しているとして、県は24日午後、国を相手に岩礁破碎を伴う工事の差し止めを求める訴訟を那覇地裁に起こした。県側は判決が出るまで、工事を一時的に禁止する仮処分も地裁に申し立てた。(沖縄タイムス7月24日)

751号ヤスクニ通信2017年8月13日  
発行 日本キリスト教会  
靖国神社問題特別委員会  
発行人 井上豊 編集 川越弘  
発行 糸広国 (大和教会)  
〒242-0021 神奈川県大和市中中央  
7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957